

The Return of the Native: エグドンの悲劇

内 藤 勸 修

トマス・ハーディの「5大小説」の最初の作品と言われる、本作品 *The Return of the Native* で、先ず我々読者に深い印象を与えるのは舞台となるエグドン・ヒースの存在であろう。冒頭の第1章を読んだ者の意識は直ちに、荒涼としたエグドンの荒野に閉じ込められ、ここでこれからどんな悲劇的事件が起こり、どのような物語が進展していくのか、幾分不安な気持ちにさせられる。

A Saturday afternoon in November was approaching the time of twilight, and the vast tract of unenclosed wild known as Egdon Heath embrowned itself moment by moment. Overhead the hollow stretch of whitish cloud shutting out the sky was as a tent which had the whole heath for its floor.

The heaven being spread with this pallid screen and the earth with the darkest vegetation, their meeting-line at the horizon was clearly marked. In such contrast the heath wore the appearance of an instalment of night which had taken up its place before its astronomical hour was come: darkness had to a great extent arrived hereon, while day stood distinct in the sky. (第1部第1章)

エグドン・ヒースは別に閉ざされた空間ではなく、その先どこへも自由に往き来できる開かれた地域であるにもかかわらず、頭上の白い雲とヒース全体にはさまれた空間は密閉感の強くなる、それ自体独立した閉された小世界という印象が与えられる。しかもこの場所は「夜の近親であり、夜が姿を見せると、その暮色と情景に互いに引き合う様が見てとれる」という程暗闇に馴染み、冬の暗闇、嵐、霧の時にこそ本性を発揮する、厳粛なものによって裏打ちされた「烈強さ」を内在させ、「悲劇の可能性をしのばせる寂しい顔」をしていた。その佇まいは、有史以前から何ものにも変化をこうむらない「昔からの悠久性」を保っていたのである。

物語の冒頭で、物語全体を支配するエグドン・ヒースが⁽¹⁾全般的な舞台として姿を現す。その現れ方は真に印象的で、最初に遠くから鳥瞰的にこの荒野の全貌が眺められ、全体像が示される。次に、この荒野の一点に焦点が合わされ、ぐっと拡大され、道を歩いて行く1人の老人の姿がはっきり見えて来る。このような展開の仕方は現代の映画が、場面を印象的に導入するのに大変

有効的に使用する手法の1つであるが、ハーディは視覚的效果を優れたものにするため、極めて有効に使用している。

悲劇的予感を醸し出す、荒涼としたエグドン・ヒースに相応しい、全体に衰えた雰囲気を漂わせる老人が会うのが、全身紅色づくめの不気味な紅殻屋で、彼の幌馬車には何やら曰くのあり気な若い娘が乗っている。エグドンを背景にした舞台全体が、悲劇に絶好の先触れとなっている。そしてこれから先もエグドンは、物語が進展して事件が起こったりする度に、かならずその背景に姿を見せるのである。 *The Return of the Native* といえどエグドンが我々の念頭に浮かぶのは、この両者に密接な繋がりがあるからである。これから見ていくように、エグドンは本作品の単なる舞台であるに留まらず、登場人物の外的な姿、性格、行動、そして運命にまでも深い影響を与え、物語の筋をも支配する強大な力となっている。その厳然たる存在は主要人物の心理に陰翳を与え、この場に応じた背景となり、事件の意義を深め複雑な性格を帯びていく。

エグドン・ヒースという概念には、この荒地の物理的場所・空間に加えて、ここで生まれ育った土地の住民たちも入れてよいであろう。彼らはハリエニシダ刈りや泥炭刈りや農作業に携わって、細々と生きており、無学であるが、エグドンに完全に同化しているので、皆陽気な性格の持ち主である。大した変化もない生活をしているので、少しでも変化が現れれば噂の種にして、界限に口伝えで広めていく。この「噂の種」になるのが、華やかな都会で生活して帰郷した「郷人」や、都会から事情があって移ってきた男女で、この背景から浮き上がった存在になっていた。この男女が事件を起こし、苦しみ悩み、喜びや悲しみの声を上げ、最後には大きな悲劇に到るのだが、「エグドン・ヒース」はその間もそれらの全てを吸い込んで、受け入れ、何事もなかったように静かで、超然としている。

さて、この舞台で喜怒哀楽を演じる人物たちには、本作品より4年前に出版された *Far From the Madding Crowd* 中の人物と対置すると明確な類似点が見られる。Bathsheba には Eustacia、Troy には Wildeve、Oak には Venn と、それぞれの人物に移行しているが、移行後は彼ら自身の抱える問題を深化している。Eustacia は心理的に出口を塞がれたエグドン・ヒースに閉じ込められ、閉鎖的な状態に置かれ、Bathsheba に比べて、遙に悲劇的状况にある。Wildeve は Troy と同様にハーディの描く悪漢の系譜を継承しているが、その否定的性格はずっと綿密に示され、社会的関係もより複雑になっている。しかし、Venn は表面的に Oak と社会的立場や恋人としての様相は似通っているが、最終的に Eustacia を救う者とはなっていない。しかし、*The Return of the Native* が *Far From the Madding Crowd* と決定的に異なる所は、Clym Yeobright という人物が創造されていることである。彼はハーディがよく描く、故郷に帰って来るといふ人物像の1つの典型と言える。一旦故郷を離れた者が長い不在の後、帰って来るとはこのこと自体に様々な問題が含まれており、この作品に重要な意味を与えている。このような人物たちの間の愛情関係の連鎖がテーマの物語において、こんなにも多くの人物たちの運命を1本の糸で結び合わせて、卓

抜なドラマに仕立て上げている例は、殆ど他の物語に見られないものである。

その導入部も、いかにもハーディらしいやり方で始まる。即ち、Wildevve と Thomasin の、結婚許可証の不備のために挙げることのできなかつた、結婚をもって始まるのである。このちょっとした間の悪い偶然のために、その結婚の背後に、女性には、社会的理由から拒絶された別の求婚者がおり、男性には、未だ式は挙げていないが、既に婚約している彼を、密かな合図で自分の方へ呼び寄せる別の女がいることが、読者に知らされる。物語の始まりの短い情景描写が、*The Return of the Native* の人物たちの置かれた錯綜した事態を予感させる。

主人公 Clym Yeobright が姿を現す前に、Wildevve, Thomasin, Eustacia の一種の三角関係が展開される。前述のように物語開始時には Wildevve と Thomasin は未だ結婚していない。その非はひとえに Wildevve にある。彼はこの人里離れたエグドン・ヒースで飽きたらない生活を送っており、その充足しない気持ちを女性との交際によって埋めようとしている。今まで Eustacia Vye を結婚相手として狙っていたが、彼女は本気ではない。彼自身かつてバドマスで技師であったが、今は「淑女亭」の主人に身を落としていて、自己軽蔑の念に捕らわれ、自分は彼女に相応しい男ではないという気後れを感じている。その上、「かつては、自分にとり彼女はこの世における全てを意味した」と言う程、Eustacia に執着している。一方、Eustacia は彼に大変傲慢に見下したような態度で接する。例え彼をミストーヴァの自分の家に呼び出しても、中には招き入れない。Eustacia が思うようにならない Wildevve は間もなく、もっと従順な女性を求めて辺りを見回すようになる。そこで、優しい性質で愛らしい、美貌という点でも Eustacia にそうひけをとらない Thomasin にも言い寄る。Thomasin は Wildevve の下心を疑らず本気で彼を愛してしまい、結婚という運びになる。だが、Thomasin が結婚の場所として申し出たアングルベリーの町とは違うバドマスで前もって結婚許可証を交付してもらっておきながら、時間的に問題が起こらない内に、その許可証を確認しておかず、Wildevve は単純な過失のために結婚式が挙げられない。この過失は *Far From the Madding Crowd* で Fanny が、All Saints' Church と All Souls' Church という名前の似た2つの教会を混同してしまったという純然たる不慮の出来事と比べ、より大きな悲劇を直接に呼び寄せたわけではないにしても、Wildevve がこれから妻にしようという Thomasin をどれ程思っていないかを明らかにしている。その証拠に彼は、Mrs Yeobright の詰問に対し、あたかも食事の約束を違えてしまったかのような心のこもらない返答をしている。

後述するように、Eustacia はこのエグドン・ヒースを嫌い、憎み、脱出する機会を狙っていたのだが、こうした本人の気持ちとは裏腹に、彼女はこの場所と融合して、一体化している。11月5日の夜の篝火の祭りの時、村人たちの仲間になるのを潔しとせず、彼らに先回りしてただ1人「雨塚」に佇む彼女の姿は、彼女が既にエグドンと同化し、その一部となってしまっていることを示している。

There the form stood, motionless as the hill beneath. Above the plain rose the hill, above the hill rose the barrow, and above the barrow rose the figure. Above the figure was nothing that could be mapped elsewhere than on a celestial globe.

Such a perfect, delicate, and necessary finish did the figure give to the dark pile of hills that it seemed to be the only obvious justification of their outline. Without it, there was the dome without the lantern; with it the architectural demands of the mass were satisfied. The scene was strangely homogeneous, in that the vale, the upland, the barrow, and the figure above it amounted only to unity. Looking at this or that member of the group was not observing a complete thing, but a fraction of a thing. (第1部第2章)

彼女の存在もその美貌もエグドン・ヒースという背景こそ一番相応しいものであることを暗示している。彼女のエグドンに対する嫌悪が強ければ強い程、エグドンとの絆は太くなり、切っても切れないものになるのである。

Eustacia Vyeは「女神の素材」であった。それも異教の女神であり、「夜の女王」という人を当惑させる人物で、ロマン主義的色彩の強い、妖婦のような女性であった。望遠鏡と砂時計を手にし、篝火を背にして、夜の闇と近親関係にあるエグドン・ヒースに屹立する魔女的存在であった。このように、彼女の存在はエグドンという舞台を抜きにしては考えられず、この舞台の上でこそ彼女の姿は、読者の想像力の中で豊かなイメージを作り出すのである。これから先、エグドンでの彼女の位置、エグドンに対する彼女の反応、エグドンと彼女の内的関係は、この作品を読む上で大変に重要な鍵となっている。

もし大雑把に言って、肉体に係わる喜びを肯定する文化をヘレニズム、否定する文化をヘブライズムと言って良ければ、Eustaciaはヘレニズム文化を体現し、禁欲的で峻厳陰鬱な趣を呈するエグドン・ヒースはヘブライズムそのものを思わせる。Eustacia Vyeの出自は、ギリシャ文明を継承する地中海人であった。コルフ島出身の情熱的な音楽家を父に、イギリスの家柄の良い海軍大佐の娘を母に持ち、母方から学費を支給されて教育を受けた。更に、バドマスで幼い頃送った歡樂的な都市生活は、享樂的な父親譲りの彼女の性格に磨きをかけた。両親と送ったこのような都市生活は彼女の性格によく合っていたが、両親の死後、バドマスとは全く対極にある重厚で陰鬱なエグドン・ヒースに祖父 Captain Vye に連れて来られた。環境の異なる場所に移植された植物は外貌が変化して行き、次第に異なった様相を呈してその環境に順応した姿となると言われる。しかし、その根本的種類は変ることはない。Eustaciaもまたこのような強制的に別の環境に移された植物と同じ状況にあり、前述の通りその姿はエグドンと同化していたが、外見とは裏腹に魂は飽くまで反抗し、そこから脱出しようと苦闘していた。彼女の人生で望んでいるものは、音楽や詩、情熱などであるが、エグドンの生活はこれらをことごとく彼女に与えることはない。彼女の人生の目的とここでの生活は全く相容れないものであるので、彼女はエグドンという牢獄に全く無力な身で、否応なしに閉じこめられているという意識から離れられない。「これは私の十字

架だわ。恥辱だわ。やがて私の死因ともなるでしょう！」(第1部第9章)という彼女の血の中には、ギリシャ的な肉体と感情の自由な開放の欲求と、そうした肉体と感情の充足の儚さを知るキリスト教的な近代の理性が、分裂した状態で混じり合っていたのである。それ故、強制的に移植された植物のような Eustacia の魂は外観はともあれ、現在の生活の場であるエグドンに馴染めず、自分は「意地の悪い世界」に閉じこめられていると感じる。そして、魂の拠り所となる土地(物語の中では必ずしも明確に示されているわけではないが)への「帰郷」を熱望して、その実現に全力を尽くすのである。

Wildevve との変愛ごっこも、彼が Thomasin Yeobright にも捨てられそうになっていることが判明すると、Eustacia には急速に魅力の薄れたものになって行った。エグドン一番の伊達男に対する興味が薄らぐ頃、村人の中には Clym (Clement) Yeobright がクリスマス休暇でパリから帰って来るといふ噂が広まっていた。自分の心を満たしてくれるものを切望していた Eustacia には、この話はこの上もなく望ましいものであった。

Eustacia の印象的な登場と同様に、Clym の登場も読者に強い印象を与えるよう作者は工夫している。帰郷前にその先駆けとして村人たちの彼についての噂が広まる。小さい頃から神童的利発さを発揮し、村中の感嘆の種になり、最近ではパリのダイヤモンド商会に勤め、将来はその支配人になろうといふ噂であった。読者にも Eustacia にも、このように作者は Clym を理想化した姿として印象付けようとしている。Eustacia は村人の噂を聞いて、Clym を見る前に既に強い憧れの気持を抱く。作者が如何に彼女を「より高き女神」に近い人間として理想化しようとしても、現実には19歳のロマンティックな夢見勝ちな夢想家なのである。そして偶然に Clym に声を掛けられ、乙女の心はますます燃え上がり、是が非でも彼に近づこうとする。クリスマスの仮装劇「聖ジョージ」に強引に加わって、Clym の歓迎パーティに潜り込み、運良く Clym と言葉を交わすことになる。シェークスピアの *Romeo and Juliet* の Romeo が、Juliet のパーティに招待されないまま侵入し、Juliet と話をした後、2人の仲が急速に進展する場面を彷彿させる、ロマンティックな冒険を企てて、成功する。

Clym の帰郷は他の人間関係にも連鎖反動的に様々な影響を与える。Clym に心の傾いた Eustacia は、婚約相手の Thomasin に拒まれ、自分に強く言い寄って来る Wildevve に別れの手紙を書く。そもそも Eustacia と Wildevve の間の愛情は憎悪、軽蔑の気持がないまぜになったものであった。Wildevve を情熱の対象としてはいても、Eustacia は心の底では彼は自分には相応しい男ではないという思いから離れられない。それ故、心から彼を愛することができず、彼女の愛は苦しいものとなっている。Wildevve との関係で彼女は自分が身を落としたと考えている。しかし、彼女より身分が低いとは言っても、彼はエグドン・ヒースの若者の中では一番の教養人で、都会的雰囲気を持つ男性で、しかも、もう1人別の女性から熱愛されているのである。他人の欲しがっているものを、自分の実力で横取りすることで、その実力を誇示できると考える Eustacia

は、Wildevve を Thomasin が熱望している限り、彼の不実に関し抵抗できない。エグドンの荒野で身を持って余している彼女は刺激を求め、誇りを満足させてくれる対象を求めていた。身分が低いと彼女が軽蔑する Wildevve でも、エグドンの他の男たちよりはましであったので、彼をロマンティックな英雄に理想化していたのである。

しかし、状況は変化した。Wildevve は Thomasin に捨てられそうになり、慌てて Eustacia の所にやって来て彼女を手に入れようと迫った。Thomasin との関係が危なくなったので、たやすく手に入れ易い彼女の方に手を伸ばして来たのである。これでは Eustacia の誇りが許さない。それだけでなくとも彼女は身分不相応に低い地位の Wildevve を愛して、自分の品位を傷付けてしまったと心の底では考えているのである。そのような Wildevve に対する軽蔑の念が、彼女の心の中で顕在化して来るが、彼を英雄視し、買い被っていたことを認めると、自分自身の愚かさに直面せざるを得ない。この認識は当然彼女の誇りを傷付けることとなる。完全な自家撞着に陥ってしまった。

もともと彼女にとっては、日常生活の暇潰しと自分の誇りを満足させることのできる男性なら、Wildevve でなくとも誰でも良かったのである。

And so we see our Eustacia — for at times she was not altogether unlovable — arriving at that stage of enlightenment which feels that nothing is worth while, and filling up the spare hours of her existence by idealizing Wildevve for want of a better object. This was the sole reason of his ascendancy: she knew it herself. At moments her pride rebelled against her passion for him, and she even had longed to be free. But there was only one circumstance which could dislodge him, and that was the advent of a greater man. (第1部第7章)

自分の愚かさを認めずに、Wildevve を軽蔑することだけで、この苦境から抜け出せるのは「立派な人」の出現によってしかない。そこへ Clym の出現である。村人の Clym についての栄光ある噂と自分の難局からの脱出。この2つの好ましい理由により、彼女は会う前から Clym を愛そうと決心する。Eustacia が Clym に思いを寄せ、大胆にも仮装劇の一員となり、他人に顔を見られないように彼の家に入り込んで、彼の顔を見ようとする冒険をしたのは、「彼がこういう場所では例外的な存在だったからであり、また彼を愛そうと心に決めたからでもあった。何よりも、Wildevve にうんざりした後で、誰かを愛したくてたまらない状態であったからである」(第2部第6章)。しかし、この19歳の情熱的でロマンティックな傾向の行動様式を取る Eustacia には望むべくもなかったが、より注意深い観察者には充分読み取れる表情が Clym の顔には現れていた。

The face was well shaped, even excellently. But the mind within was beginning to use it as a mere waste tablet whereon to trace its idiosyncrasies as they developed themselves. The

beauty here visible would in no long time be ruthlessly overrun by its parasite, thought, which might just as well have fed upon a plainer exterior where there was nothing it could harm. Had Heaven preserved Yeobright from a wearing habit of meditation, people would have said, 'A handsome man.' Had his brain unfolded under sharper contours they would have said, 'A thoughtful man.' But an inner strenuousness was preying upon an outer symmetry, and they rated his look as singular.

Hence people who began by beholding him ended by perusing him. His countenance was overlaid with legible meanings. Without being thought-worn he yet had certain marks derived from a perception of his surroundings, such as are not unfrequently found on men at the end of the four or five years of endeavour which follow the close of placid pupilage. He already showed that thought is a disease of flesh, and indirectly bore evidence that ideal physical beauty is incompatible with emotional development and a full recognition of the coil of things. Mental luminousness must be fed with the oil of life, even though there is already a physical need for it; and the pitiful sight of two demands on one supply was just showing itself here.

(第2部第6章)

Eustacia には Clym の外的な美しさしか見えないが、作者は彼が登場してすぐに、彼の内面的な問題点を挙げ、将来の悲劇を暗示している。Clym のこの外面的なものとの内面的精神的なものとの落差は Eustacia を最後まで苦しめ悲劇に追い込んで行く。

Clym の外面的な条件はエグドン・ヒースの田舎では後光が差す程華麗で魅力的なものであった。かつては神童と噂され、現在は華やかなパリで、更に華やかなダイヤモンド商という職に就いているという彼の経歴は、このエグドンでは他を圧倒するものである。しかし、実情はかなり違っていた。幼い頃この荒野の環境で天才児ともてはやされた彼は、Mrs Yeobright を見ても想像がつくように、元来生真面目で、融通がきくという性格ではないのに、常に衆人の目を浴びて育ったので、自然にちやほやされなければ我慢できないという目立ちたがり屋の気性になって行った。パリのダイヤモンド商という派手な世界に入って行ったのも、こういう事情であった。だが荒野の勝利者が、必ずしも都会の勝利者になり得るわけではない。その逆の方が多かる。Clym もその例に漏れず、都会生活に敗北し傷心のうちに、その傷を癒してくれる故郷エグドンに戻って来たのである。思索の人でもある彼がただエグドンに戻って来るわけがない。彼はエグドンの村人たちを教育しようという大きな理想に燃えて帰郷したのであった。

母の Mrs Yeobright は、Clym の帰郷を単なるクリスマス休暇のためとは感じていなかった。しかし、改めて彼の帰郷の目的を聞かされると、村人の「教育」は難しいので、他の都会に出て別の職業を探すように勧める。だが彼は自分が正しいと決断した計画を簡単に断念し変更できる人物ではなかった。このような忠告をしたり、哀願したりする母は、自分を理解してくれないと思ひ込んでしまう。外面的な温和さの下に内面的な頑迷さがドッカと根を下ろしているのである。本質的に、質素な生活と窮乏に慣れた荒野の子である Clym にとって、最早パリは魅力のある場

所ではなくなっていた。

若い2人は互いの真の内面も目的とするものもよく理解せず愛し合い始める。Vye 大佐の家の井戸の所で、あの仮装劇以来初めて再開し、2人の恋の炎は燃え上がる。若い美男美女が互いに殆ど一目惚れのように引かれ合い、恋に落ちて行くのは何の不自然もないが、2人の一致している所は情熱的な感情のみで、本質的な根本部分はむしろ反対方向を向いていた。2人の生活基盤になるべき基本的な姿勢の相異は、それを互いにはっきり認識するようになった時、その関係に大きな影響を与えざるを得ない。情熱的となった2人は、自分たちは互いに結ばれる運命にあると考え、この重大な対立も真剣な論議になることなく、愛する者たちによく有り勝ちな、愛情によってどうにも解決できる問題という心地になっていた。だが、Clym ははっきりした理由もなく、Eustacia が村人教化のために大いに役立ち、教育活動の助手になってくれることを望んでいた。即ち、彼女を精神的にも肉体的にも高いものとして求め、教育改革運動の協力者が欲しいという自然の願いから、それに相応しい人物と彼女を理想化しているのである。一方、Eustacia は今まで、村人とも交わることなく、孤独な自分の境遇とよく似た神話上、歴史上のロマンティックな人物を我が身に引き寄せて考え、このような人物を通し、衝動を「自己の歓喜」にまで高め、「運命」を敵対者にし、エグドン・ヒースを「地獄」に見立てている女性である。

更に、Clym はパリやダイヤモンド商が象徴するもの一切に見切りを付けて「帰郷」した、作者の言う「新しく生まれつつあるタイプの人間」で、今で言うなら反体制的なドロップ・アウトした者である。その結果、何の特権もない人々の教師になる志を立てたのである。Eustacia は、「地獄」から何が何でも脱出したいと望んでいるので、正にその念願を叶えてくれる男性としてClym を見ている。自分の目的とは反対のClym の目的が分かってはいても、Wildevé との関係で自分の力に習熟したEustacia は、彼の気持を変えさせ、自分の希望に沿うように、パリに自分を連れ帰ってくれるように彼の心を動かし、説得することは、簡単なことだと信じ込んでいる。Clym の態度は、彼女にそのような希望を満たすきっかけを何も与えていないのに、彼女はこれまでの生活で培われて来た自己中心的な考えでそう考え、情熱に駆られて結婚することになるが、この成算のない目論見が哀れな誤算となり、やがて破局に到る最大の原因となるのである。現実離れした、地に足がついていないような生活態度で、恋に恋している「ロマンティックな」Eustacia は「特定の恋人に思い焦がれるというよりも、情熱的な恋という抽象概念に憧れているようだった」(第1部第7章)と描写されているように、「情熱的な恋」ができれば、相手はClym ではなくとも、他の誰でもよかった。それ故、情熱から覚めた時、現実の姿は普通の人を感じる、何倍も大きな困難さを伴って迫って来るのである。

当事者本人たちの関係の危うさに加えて、彼らを取り巻く人々もこの2人にとって有利なものではなかった。その第一はMrs Yeobrightであった。彼女は牧師の娘で、一介の小作人と結婚した。夫は社会的功名心が一かけらもなかったもので、彼女は自分の人生で満たすことのできなかつ

た願望を息子が実現してくれることを期待して教育して来た。更に息子が出世の見込みある職業に就けるように手助けしてやったが、彼の禁欲的な性格にはダイヤモンド商のような派手な仕事は合わず、何が自分の天性に合った職業かと考え、荒野の村人たちの教育を志した。Mrs Yeobright は息子のこの希望に理解を十分に示すが、最初から立身出世ということ避けるやり方で生きて行こうという考えに、全面的に賛成するわけにはいかない。息子に出世してほしいという夢を託した母親が、その息子に裏切られてしまう。その上、自分の意に染まぬ女性と結婚し、出世の道に完全に背を向けようとしている。母が息子を非難する理由はここにある。母の怒りは、息子よりはその相手の女性に向かうのも自然の成り行きである。

Clym が母に Miss Vye はどんな娘かと聞くと、「バドマスから来た高慢な娘なのよ。私は余り好きじゃあないわ」と、もともと彼女に好感を持っていない気持を示す。牧師の娘として禁欲的に厳格に生きて来た Mrs Yeobright にとって、「夜の神秘に満ち」、異教徒のような輝きの眼を持つ、ロマンティックな気性の Eustacia は、全ての面で自分と対極にいるような娘であった。Mrs Yeobright は、好ましくない女性と結婚しようとする息子を思い止ませようとする母親の常として、Eustacia のことを非難し始める。彼女は Eustacia が「ものぐさで、不平たらたらのねっ返り」(第3部第3章) だとか、「あまりにも怠け者過ぎて魅力的どころではないよ。あの人が自分にも他人様にも役に立ったなんて聞いたことがないわ」(第3部第2章) と非難する。そして、「何もかも、あなたを悲しみから救い出そうという気持から言っているのだよ」という母親の決まり文句を投げかけ、Clym に彼女との結婚を思い止ませようとする。このような言葉が、例え Mrs Yeobright = Eustacia、即ち姑=嫁の間の単なる生活環境の相異と、世代間闘争の片鱗であったとしても、Clym は母親の仮借ない敵意に動揺する。だが、Clym は次第に母親の非難の背景に潜んでいる嫉妬心に気付き、母と対立する時、ますます Eustacia の肩を持つようになって行く。

母 Mrs Yeobright には、Eustacia のことで息子と争うようになって、悲痛な気持がありありと現れて来る。Eustacia を挟んだ母子の関係がちょっとした出来事にもはっきり示される。ある時、地方の塚が発掘された時に出土された骨壺を、Clym は母に持って帰ろうと思い、1つ取る。だがこの不気味な骨壺は Eustacia にこそ似合うと思ひ彼女にやってしまう。Mrs Yeobright の耳にこのことが入り、Clym に怒った口振りで話す。息子は母の怒りに抵抗できず、沈黙を守らざるを得なかった。Clym は Eustacia に引かれて結婚に到るまで、心が千々に乱れた。Clym の性格や行動様式は母の清教徒的な厳しさ、感情を抑え、清貧を旨とする生活態度と殆ど同種のものであるが、Eustacia は労働に見向きもせず、贅沢を求め、高慢で、感情の抑えがきかず、激情的である。しかも、これまで母とは親密な精神的絆で結ばれた生活を送って来たので、母に対する Clym の愛着は異常に強く、むしろ官能的色彩の濃いもので、Eustacia に対する愛情にも負けないものであった。それ故、Eustacia と官能的雰囲気を持った時間を過ごした後は、こと更に母の

眼を気にするのである。

On an evening such as this Yeobright descended into the Blooms-End valley from beside that very pool, where he had been standing with another person quite silently and quite long enough to hear all this puny stir of resurrection in nature; yet he had not heard it. His walk was rapid as he came down, and he went with a springy tread. Before entering upon his mother's premises he stopped and breathed. The light which shone forth on him from the window revealed that his face was flushed and his eye bright. What it did not show was something which lingered upon his lips like a seal set there. The abiding presence of this impress was so real that he hardly dared to enter the house, for it seemed as if his mother might say, 'What red spot is that glowing upon your mouth so vividly?' (第3部第3章)

この Clym についての描写は、相手が母親ではなく、いわゆる男女の関係を意識させる異性に対して、我が身の行動を隠すような態度である。

Clym は内面的に分裂する。そして、Eustacia にのぼせ上がり、恋に盲目になった Clym は、母親に反抗し、母親と反対の立場に立ち、恋人の欠点には目をつぶってしまう。ただ母親に理解が欠けていることだけを問題にし、非難する。母親と恋人の間で板挟み状態になってしまった Clym は、その状態から抜け出すために、母か恋人を傷付けなければならない。最初は、常に自分の味方であった母に敵視されたため、Eustacia の味方に立つ決意をした。外面的には母と離れることとなるのである。だが、母と別れ、Eustacia のもとに走っても、Clym に心の平安が待っているわけではない。「私はパリは好きだけど、あなただけを愛しているのよ。それは、あなたの妻としてパリで暮らせれば私には天国ですけれども。でも全くあなたなしでいるよりは、あなたと一緒にこの庵に住む方がいいんですわ」(第3部第4章)などと Clym の心をくすぐる Eustacia ではあったが、本心はパリに行くことを切望していることは明らかで、Clym 自身もこの Eustacia の甘言を心の底から信じているわけではなかった。彼は自分がどんな窮地に置かれているか気づき始めていた。

Three antagonistic growths had to be kept alive: his mother's trust in him, his plan for becoming a teacher, and Eustacia's happiness. His fervid nature could not afford to relinquish one of these, though two of the three were as many as he could hope to preserve. Though his love was as chaste as that of Petrarch for his Laura, it had made fetters of what previously was only a difficulty. A position which was not too simple when he stood whole-hearted had become indescribably complicated by the addition of Eustacia. Just when his mother was beginning to tolerate one scheme he had introduced another still bitterer than the first, and the combination was more than she could bear. (第3部第4章)

この時点では既に「彼に対する母親の信頼」は大きく揺らぎ、殆ど損なわれてしまっていた。Clym の精神生活で最重要の位置を占める「母の信頼」がなくして、彼は他の2つの「成長物」を生かし続けて行くことができるのであろうか。彼は新しい人生の門出の時に、難問に突き当たってしまうのである。

Clym と Eustacia のまわりで、不満にくすぶり、その間に割って入りたいと思っている次の人物は、Eustacia に捨てられ Thomasin と結婚した Wildeve である。事の成り行き上、Thomasin と結婚した Wildeve であったが、大人しいだけで面白味のない彼女との結婚に幻滅し、未だ Eustacia への未練が完全に絶ち切れていない。彼の本性は「手に入れにくいものに焦がれ、差し出されたものにうんざりする、遠くのを求め、近くのを嫌う」(第3部第6章) のであり、気まぐれで複雑で発作的な欲望を持っている。この本性のために女性関係でいつも目移りがしており、目的が定まらない。1人の女を今1人の女と反目させて、漁夫の利を占めるような手段を画策する。最初 Thomasin に結婚を承諾させておいて、Eustacia に新たな愛欲を燃やす。そして移住の提案をして、Eustacia の気を引き、万一彼女がそれを拒絶したら、Thomasin で我慢をしておこうという気持で、彼女からも目を離さない。Mrs Yeobright が Diggory Venn の求婚を利用して、求婚者は彼1人だけではないと、Thomasin との結婚の履行をせまると、今度は Wildeve の方は自分に Thomasin という保険をかけて、Eustacia に決心を迫る。Thomasin との結婚を武器にして Eustacia に接近しているが、最後にはただ Eustacia に復讐するためだけで、Thomasin と結婚している。Eustacia に対する愛を Thomasin への愛で代替えしようとしても、せいぜい Wildeve の傷付けられた誇りを癒すのに役立つだけである。Clym を知って Eustacia が Wildeve に出した別れの手紙を彼は真面目に受け取らず、その手紙は彼の不実な態度を懲らしめようとするものと考え、生意気な彼女に同様な方法で逆襲してやろうと考えているのである。このように彼は、Eustacia の魅力によって彼女の行動範囲内に引き込まれ、そこから抜け出せ得ないでいる。Clym と Eustacia にとって所詮ものの数ではないと言っても、彼らのまわりをフラフラされては、彼は依然として行く手に不安を残す存在には違いない。Eustacia が Clym と結婚し、Wildeve が Thomasin と結婚して、Eustacia と Wildeve はきっぱりと道を分かったはずでも、今度は Clym と Thomasin の血縁関係のために、Eustacia は Wildeve と新たな関係を持つことになり、この2人の間にはなお或る種の不安材料が消滅しないのである。

Clym と Eustacia の新婚生活の甘い気持は2週間もしないうちに薄らぎ、互いの愛情を消耗し尽くし、2人を包んでいた眩い光に照らされていた霧も殆ど消え、現実の生活がはっきり見え始め、危うい状態になりそうになった時、Mrs Yeobright が渡そうとしたお金が、Clym と Eustacia 側にうまく渡らず悶着が起り、早くも嫁姑の争いがはっきり表面化する。この嫁姑の問題をうまく解決するのは学校経営の理想を早期実現することであろうと、Clym は前にも増して読書に専念するが、不幸にも目の疲労で重い眼炎を患うようになってしまった。治療のために読書の中

止し、荒野に出てハリエニシダ刈りを始めることとなる。

パリでの華やかな生活や立身出世を振り捨ててエグドン・ヒースに戻って来ただけあって、荒野に入って仕事をする Clym の姿は「一面に広がる黄緑色のハリエニシダの真ん中の褐色の一点に過ぎず、それ以上の何物でもなかった」(第4部第2章)。Clym は自然にすぐエグドンの荒野と同化してしまい、彼が仕事をする回りの生き物たちは、彼を自分の仲間のように見做している。

His familiars were creeping and winged things, and they seemed to enroll him in their band. Bees hummed around his ears with an intimate air, and tugged at the heath and furze-flowers at his side in such numbers as to weigh them down to the sod. The strange amber-coloured butterflies which Egdon produced, and which were never seen elsewhere, quivered in the breath of his lips, alighted upon his bowed back, and sported with the glittering point of his hook as he flourished it up and down. Tribes of emerald-green grasshoppers leaped over his feet, falling awkwardly on their backs, heads, or hips, like unskilful acrobats, as chance might rule; or engaged themselves in noisy flirtations under the fern-fronds with silent ones of homely hue. Huge flies, ignorant of larders and wire-netting, and quite in a savage state, buzzed about him without knowing that he was a man. (第4部第2章)

彼自身もエグドン・ヒースに没入し、喜々として歌を口ずさむことができるのである。こうして見ると彼は正に「エグドンの申し子」とも言え、彼の博愛主義的な学校設置計画は綿密な熟考の後の周到な計画というより、「いろいろと考えてみて、外の所に行くより、ここにいる方が少しは人の役に立てると思って帰って来たのだよ」という彼の言葉が物語るように、「先ずエグドンありき」というエグドンへの強い愛着と深い思慕の念に駆られて、帰郷した事に対する、後で考えた口実に近いものだと思われる。彼の本心では飽く迄帰郷が主で、学校計画は従に過ぎないのである。

自由の都市パリという都会を捨てて、自ら求めてこのエグドン・ヒースに戻って来たという事実は、確かに均衡を保った精神を持つ人々の考える事ではない。パリでダイヤモンド商をしていた若者が、その仕事に価値を見出せずに故郷に帰って来た。村人を愛していたので、彼らの蒙を啓くために学校を建て、知識を与える仕事を始めようというのである。金持ちにダイヤモンドを商う仕事が華美で虚飾に満ちたもので、質素な生活を厭わない Clym の性格に合うものではないにしても、故郷の村人の教化という仕事を思い付くという彼の精神の振幅は、やはり大き過ぎるものであろう。仕事に対する不適格性を痛感し苦しみ、精神の不均衡を来たした結果の帰郷というのが、隠された理由となっているのであろうが、必ずしもそれが村人教化の直接の動機と強く結び付くとは考えられず、動機付けが希薄過ぎるように思われる。即ち、村人教化という Clym の内的必然性は読者が納得の行くようには知らされていない。作者ハーディは、Clym に対して積極的に動機付けをしておらず、あたかも彼が村人を啓蒙するという志を立てることが既定の事

実であるかのように、至極当然に描かれている。

しかも、彼は教師になるべく猛烈な読書中に眼病に冒され、勉強して教師となる資格を得ることは当分諦めなければならなくなる。そこでハリエニシダ刈りの仕事を自分で見つけ満足している。彼は自分の「社会的地位に直接影響する災難に直面しても、全く冷静」(第4部第2章)である徹底した禁欲主義者であり、しかもエグドン・ヒースで働くことは彼の本性に合致していた。学校建設と村人教化という当初の教育計画は、Eustaciaと結婚し、彼女をも参加させるために一部を変更したが、更に眼病のため、計画を縮小し寺小屋式夜間学校を遠い将来に作ろうといったものに変化していった。ハリエニシダ刈りの仕事のような肉体労働に勤しんでいるClymを見ながら、Eustaciaは焦り、絶望的な気持になって行く。Clymのような本質的禁欲主義者にとって、ハリエニシダ刈りも学校の経営や村人教化の仕事も大差ないのである。彼にとって、村人教化の目的はエグドンに帰るための、1つの方便であり、妥協策であった。華やかだが、精神的には空しかったパリでの生活は、禁欲的な彼に内面的充足を強く求めさせ、精神的価値に考えを向けさせたのであろう。エグドンの荒野は彼の禁欲主義と精神主義を正に具現した場所であった。Clymがこの地に全てを捨てても帰って来なかったのはこのためであろう。そしてエグドンは彼から、地位や華やかで享楽に満ちた生活など、全てのものを奪ってしまう。Clymはエグドンにますます同化して行き、身1つで働き、内面的世界に深く沈潜し、その価値を見い出して行くのである。Clymの精神はエグドンと同一化して、エグドンの表す価値観そのものとなって行く。

If any one knew the heath well it was Clym. He was permeated with its scenes, with its substance, and with its odours. He might be said to be its product. His eyes had first opened thereon; with its appearance all the first images of his memory were mingled; his estimate of life had been coloured by it; his toys had been the flint knives and arrow-heads which he found there, wondering why stones should 'grow' to such odd shapes; his flowers, the purple bells and yellow furze; his animal kingdom, the snakes and croppers; his society, its human haunters. Take all the varying hates felt by Eustacia Vye towards the heath, and translate them into loves, and you have the heart of Clym. (第3部第2章)

Clymのヒースに対する愛をことごとく憎悪に置き換えると、Eustaciaの心が出来上がると作者が言っているように、彼女は彼がヒースにのめり込んで行くのを見て、強い危惧の念を抱く。Clymがハリエニシダ刈りをしながら鼻歌をうなっているのを見て、強いショックを受ける。「こんな藪だらけの丘に親しさと快適さを感じるなんて、あの人是一体、どんな興味の人なのかしら？」(第2部第3章)と、Clymを初めて見た時発した言葉通り、Eustaciaにとって、この土地特有なものとパリの的なものが心のなかで混在している男など想像ができなかった。彼の経歴を噂で聞いている彼女には、物質主義に反発している彼の気持が全く理解できないのであった。

夫が眼を患ったために、自分の期待がことごとく裏切られたことを意識せざるを得ないEusta-

cia は、大きな屈辱を感じる。彼女の愛も、期待と共に消失して行くのである。2人を襲った、この如何ともしがたい状況に順応できずに苦しむことになる。自分の望みの虜になり、その望みを遂げる事ばかり考えている彼女は、Clym の真の性格を見落しているのである。Clym がハリエニシダ刈りのつつましい生活で満足していただけることは、どうしても理解が行かない。そして下層労働者の妻であることを恥ずかしく思い、そのことで彼女を辱めたと言って、夫に同情するどころか非難する。自分の運命に満足できないのは夫のせいだから、夫の不幸より自分の不幸の方が同情に値すると考えるのである。こうして Clym に対する彼女の感情は、分裂し、彼女の愛情のなかには不協和音が鳴り響くようになり、相反する感情が内面的に並存することとなる。こうした Eustacia の心の不安定が昔の愛人 Wildeve の試みる求愛を受け入れ易い土壌となり、彼は彼女をまた自分に引き寄せる可能性を瞬時に嗅ぎ付ける。

Eustacia と Wildeve の関係が再開したことが間接的に引き金になって、大きな悲劇を引き起こすことになる。Diggory Venn の忠告を取り入れて、8月31日の炎暑のなか、Mrs Yeobright は Eustacia と仲直りをするために、オールダワースの息子夫妻の家を訪ねて行く。この日は Mrs Yeobright ひいては、Clym と Eustacia にとっても最悪の日となってしまう。この場の設定及び出来事は、作者ハーディのよく使う悲劇的な偶然のために、より悲惨な結果に到る。Mrs Yeobright は夏の炎天下、よりによって一番暑い日中にヒースの6マイルもの道のりを歩き、疲れ果ててしまう。息子の家を見下ろす丘辺で20分程休憩を取っている間に、Wildeve が Eustacia を訪ねて来る。姑が訪ねて来た時、Eustacia は義母に姿を見られながらも、Wildeve が家の中にいたので、戸を開けてやらない。眠っている Clym が気付いて開けてくれると期待し、Wildeve を裏から逃がし、自分も母子2人の話があるであろうと庭でブラブラして時間を潰す。暫くして家の中を見れば、Clym は相変わらず眠ったまま。姑は帰ってしまっていた。不運は不運を呼び、Eustacia の姿をちらと窓越しに見ただけでドアを開けてもらえなかった Mrs Yeobright は、息子夫婦の冷たさを噛みしめながら帰路に着いた。途中 Johnny Nunsuch が近づいて来て、色々話し掛ける。疲労困憊してしまった Mrs Yeobright はそれにあたかも夢遊病者のような応答をするのである。Johnny に帰り際、「息子に捨てられ、胸が張り裂けてしまった女に会った」(第4部第6章)と母親に言いなさいと言って、彼女はその子と別れた。これが彼女が生前人に発した最後の言葉となった。

ハーディの小説によく現れる不運な偶然が、この出来事には幾つも出て来る。些細な出来事が人の行動の軌跡を微妙に変え、それが連鎖反応を起こしたように色々な出来事を招来し、結果的には大きな変化一人に不幸を運ぶ変化一となって、人の前に立ちふさがり悲劇に陥れて行くことになる。Mrs Yeobright の死に到る出来事も、Diggory Venn が彼女に良かれと思ひ忠告したことが発端となり始まる。そして、その後次々に起こる不幸な偶然による出来事。Mrs Yeobright の炎天下での体調を考えない息子夫婦への訪問、Wildeve の偶然の Eustacia 訪問、Clym が母を招

じ入れるだろうという Eustacia の勝手な推測、Mrs Yeobright の Johnny に発した「遺言」及び蝮に噛まれた不運等々。ハーディが後に「神の摂理」とも言うようになる偶然がここでも多用され、登場人物の運命に重大な影響を与えている。この偶然の多用に対して、私たち現代の読者は多少は違和感を抱くかもしれないが、反発を感じることはなかろう。小説を読む私たちには物語を読むことは異次元の世界に入り込むことだという共通理解があろうし、その中では異常なものを求め、小説は人工的なものであると考えているからである。ハーディも 'it is not improbabilities of incident but improbabilities of character that matter...' 「問題なのは出来事の不自然さではなく、人物の不自然さである…」⁽³⁾とやっているように、私たちの意識は出来事の異常さを問題にするより、人物の全体的描写の方をより問題にするであろう。この場面では人物たちは偶然の出来事に巻き込まれ翻弄されるが、それぞれの特性の一貫性は失っていない。

母の死後、Clym の心は Eustacia から母のもとに完全に戻ってしまう。荒野で母が何故あのような死に方をしたのかについて考え、半狂乱のように苦しみ、悩む。色々調べた末に、その大体の事情が分かった時には、彼の心にあるのは、母には後悔と思慕の念、Eustacia には非難の気持であった。Clym の心はハーディが言っているように「均衡が取れていない」のである。

Was Yeobright's mind well-proportioned? No. A well-proportioned mind is one which shows no particular bias; one of which we may safely say that it will never cause its owner to be confined as a madman, tortured as a heretic, or crucified as a blasphemer. Also, on the other hand, that it will never cause him to be applauded as a prophet, revered as a priest, or exalted as a king. Its usual blessings are happiness and mediocrity. ... It never would have allowed Yeobright to do such a ridiculous thing as throw up his business to benefit his fellow-creatures. (第3部第2章)

彼の考えは1つのことに捕われると、バランス良く考えられずに偏った方向に向かう。この精神の不均衡が、彼の行動の極端さを招来する。ダイヤモンド商からエグドン・ヒースの教師への転換の決意にしても、Eustacia のみならず誰でも、彼が本当にパリでの華やかな生活を捨てて、エグドンの田舎で、教育の道を志すつもりなのかいぶかしく思い、なかなか信じ難いであろう。それは彼の考えを聞いた後の、

'He'll never carry it out in the world,' said Fairway. 'In a few weeks he'll learn to see things otherwise.'

'Tis good-hearted of the young man,' said another. 'But, for my part, I think he had better mind his business.' (第3部第1章)

という Fairway たちの言葉が端的に表しているように、この言葉は Clym よりずっと教育がなく無

知でも、均整の取れた精神の正しい判断でもあったろう。更に Thomasin と Wildeve のスキャンダルに反発した最初の偏狭とも言える態度、そして、母の死後 Eustacia に対する非難。これではとても彼が高い徳性を持ち、均整の取れた考えのできる人物とは言えない。

均衡を欠いた精神は、時計の振り子のように一方からもう一方へと大きく振れて、回りのものに大きな影響を与える。当初 Clym は、Eustacia の持つ女性の魅力に大いに引きつけられたが、同時に村人教化の協力者が欲しいという当然の願いから、彼女をそれに相応しい人と考えていた。しかし、Eustacia の望みを知るに従って、徐々に彼の理想は崩れて行く。自分の国で「讃えられることのない予言者」として、Clym は理想実現のためには「犠牲者になる覚悟」を持っていた。自己中心的でロマンティックな Eustacia と反対方向のロマンティストである。「教化」されるはずの村人の方は彼の計画を聞いて、別に喜ぶでもなく、上の引用で「わしから見りゃ、御自分の仕事に精を出された方がええって思うよ」と言っているように、彼の理想が一人よがりのもので、それが実現しても彼の考えている姿になることは難しいことが暗示されている。Clym も Eustacia も夢の中で砂の上に自分の理想を築いているのである。

母の死後、悔恨と自責の念に苦しむ Clym の心の中では、今や母の存在は美化され、眩く後光に照らされた聖女のようになっていた。そして強情な心で母に抵抗した我が身を呪い、母を死に追いやった責任は自分にあると苦悩する。その日のことについて何を聞いても、口を固く閉じている彼女をかたわらに置き、Clym は母の死の原因の一端は自分の頑なな態度にもあったと言って自分を責めている。それを見た Eustacia にはなお一層弁解の可能性がなくなってしまう。前述のように、母の死んだ日の事を調べていくうちに、その日母が自分の所に和解しようとやって来たが、Wildeve が居合わせたので、Eustacia はドアを開けてやらなかったという事実が判明した時には、彼の心は強烈な打撃を受けた。Mrs Yeobright と Wildeve という都合の悪い 2 人の訪問客が重なったために、長い間今にも起こりそうな危険をはらんでいた破局が誘発され、決定的なものになってしまった。Eustacia は既に、Wildeve と付き合っていたことを姑に知られ、不興をかっており、更にここで彼の訪問を許していることが知れたら、姑は当然 Eustacia の動かぬ不義の証拠と考えるはずである。その上、Eustacia は未だ消えていない姑との敵対関係を意識し、ドアを開け招き入れようとしなない。

こうして Eustacia には姑 Mrs Yeobright の死に対して 1 つの負い目ができてしまった。それ自体には悪意のない Wildeve の訪問は悲劇の幕開けと化してしまう。更に、頑固に沈黙を守り続ける Eustacia は、ますます自分の罪を重く、救いようのないものにして行く。眠っていた Clym が気が付いて母を家の中に入れていたと思っていただけの弁解は何時でもできたはずであるのに、しようとしなない。一方、Clym の怒りは、Eustacia の母に対する好ましくない態度と、彼女が事の真相を沈黙して語らないため、自分が厳しい罪悪感を抱かされたことにあった。そのため、母が訪ねて来た時、1 人の男が彼女を訪問していたという事実が知れると、彼は厳しく彼女を非難し

始める。彼女に対する誹謗は限界がなくなってしまう。その後、Mrs Yeobright の死をめぐっての2人の口論は熾烈を極めるのである。

ここで Eustacia の大きな欠点と見られた強い自負心と高慢さが1つの徳性と変わる。精神の偏狭さを露にした Clym の激しい非難に、Eustacia が毅然と返答を拒絶した時に、この徳性が見えはつきり見える。「何1つ悪いことをしたことがないということを、唯一の潔白とするなら、わたしはとでも許してもらえません。それでもわたしはあなたの良心に助けてもらおうとは思いません」(第5部第3章)と反駁する。これに反して Clym の態度は全く男らしくなく、公平さも欠いている。Eustacia は、他の男と共に彼を侮辱し、母には残酷な仕打ちをした。その彼女に魅入られていたのは自分が愚かなためであった。あらゆる人が陰で悪く言う女に良いところがあるはずがないと断言してしまう。この言葉は、Mrs Yeobright が、かつて Eustacia に浴びせていた非難の言葉であり、彼はそれをそっくりそのまま繰り返すことで母の影響をどれ程強く受けていたかをはっきりさせ、妻に対して愛の消滅と憎悪の気持を強く示した。Eustacia の自らの尊厳性を保持する態度と、Clym の不安定な感情に左右され、母の影響力から脱し得ず、苦悩する姿が対比して示されている。

Clym の和解の手紙も運悪く手に渡らず、エグドン・ヒースから脱出するという計画の最後の瞬間に、Wildevé のお金を頼ることは、彼の愛人になることだと気付いた Eustacia は、絶望の余り、大雨の中堰に身を投げ自殺する。

Eustacia は最初から最後まで反抗者としての態度を失うことはなかった。この作品の到る所で運命を支配する天の力に抗議している。最初は気まぐれに Wildevé と結婚を考え、次には本気で Clym と結婚することによって、地獄と見えたエグドンから逃れようとする努力はむくわれず、夢は破れ、最後に今や金持ちとなった Wildevé に再び夢を託し、大陸へ脱出を計ろうとする。しかし Eustacia は今まで半ば戯れに Wildevé と交際して来たが、理性の上では常に彼の欠点や愚劣さを明確に洞察し、そのような男の情婦に甘んじる自分を激しく嫌悪して来た。そして彼女のエグドンからの脱出という夢が殆ど叶いそうになった時に、彼女の自負心は Wildevé に身を任せる事を許さない。

'Can I go, can I go?' she moaned. 'He's not *great* enough for me to give myself to — he does not suffice for my desire! ... But to break my marriage vow for him — it is too poor a luxury! ... And I have no money to go alone! And if I could, what comfort to me? I must drag on next year, as I have dragged on this year, and the year after that as before. How I have tried and tried to be a splendid woman, and how destiny has been against me! ... I do not deserve my lot!' she cried in a frenzy of bitter revolt. 'O, the cruelty of putting me into this ill-conceived world! I was capable of much; but I have been injured and blighted and crushed by things beyond my control! O, how hard it is of Heaven to devise such tortures for me, who have done no harm to Heaven at all!' (第5部第7章)

このように Clym に愛を拒否されてもなお、Wildevve の助力を拒否する誇りは消えていない。自分の夢を託した夫とは別れ、身を落として Wildevve のものにはなれない。この期に及んでは、エグドン・ヒースから脱出できる手段は最早死しか残っていない。Eustacia は堰に身を投げ、私たちの前から姿を消してしまう。自分自身について抱いていたロマンティックな考えを守るために、最後の自由な選択をしたのである。生きている間、妥協を計ることを軽蔑して放棄して来た Eustacia は、死を選ぶ時最後にもう一度、これまでずっとその行動を特徴付けて来た、厳然とした誇りを顕示して自ら命を絶った。現実より憧れに生きた Eustacia は未だ娘ざかりで20歳にもなっていなかったのである。

上の Eustacia の言葉は彼女の一生の要約である。絶望と悔しさに満ち、最後に「天」と呼ばれる、人の力を超える、より大きな存在に対する抗議となっている。自分の持てる能力や可能性に比して、自分の前に立ちはだかる運命の苛酷さ。何でも実現できる能力があったのに、私を超えたものの存在の力が、私を傷付け前途をも閉ざしてしまった。このような責め苦を受けなければならぬ程、私は悪いことは何もしていない。豊かな可能性を持った者が、その可能性を開花できなかった現実に対して感じる絶望の気持を、Eustacia は血を吐くような苦悶の中で訴えている。志を全うできない悔しさの気持は、私たち誰もが普遍的に抱く人生における苦い経験であろう。それ故、彼女のこの言葉は、それだけを聞くと、浅薄な自分本位の泣き言、大げさで自意識過剰な誇大妄想に思えるが、この叫びに到るまでのエグドン・ヒースでの閉塞的な生活と、そこから脱出しようという、全力を尽くした彼女の努力を知る読者には、或る種の限界を持った1人の女性の、ひたむきな生き方の末の声と聞こえるのである。そして、これは彼女の最後の反抗の叫びであり、読者に対する遺言ともなった。

ハーディの描く人物は普遍的な人間の経験を拡大して、悲劇的なスケールにまで高めて行く。後の作品における Jude の勤勉さや向学心、その結果、得た学殖の高さ、また Tess の若々しく、豊かな感受性と生命力などは、彼らの悲劇的人生では現実には実を結ぶことなく、立ち枯れして、朽ち果ててしまうのである。彼らはその恨みと挫折感をずっと保持し続け、目標の軌道を修正して、他の目標に代替えすることをせずに、ひたすら当初の目的に執着し、その実現に努力する。そして、空しい結果しか生まない情熱的なエネルギーは、彼らの人生の不毛さを悲劇的な偉大さとも言えるものへと押し上げて行く。

物語のクライマックスで、主要な登場人物たちは緊張をはらんだ暗闇の中で全員勢揃いする。そこで、突然死が急転直下の決着を付ける。Eustacia は堰に落ち溺死する。それを知った Wildevve は彼女を助けようと外套を脱ぐ余裕もなく、飛び込み死んでしまう。そして、最後まで地道に生活して来た者が幸福を掴む。即ち、真っ赤な風体の不気味な謎に包まれた存在であった紅殻屋 Diggory Venn はきれいさっぱりと紅を落とし、今や立派な酪農主として、未亡人になった

Thomasinの前に現れる。2人は最後に結ばれるが、作者ハーディは後に脚注⁽⁴⁾で、VennとThomasinの結婚について異例の言い訳をしている。彼の作品の中ではこのようなことは他には1度もない。

一方、Clymは母とEustaciaの墓参りを日課とし、独学で巡回説教師になるという精神の支えを見い出す。エグドン・ヒースに魅入られたClymはダイヤモンド商、学校教師、巡回説教師へと、徐々に自分の人生を切り捨てて行くのである。そして、人生を捨て去った所から、近代人の故郷への回帰の1つの態度を見い出そうとする。巡回説教師としてのClymは最早、人々を教化しようとする競いの心すら持たない。彼は自らの体験に基づいて、自分自身の言葉で語り、耳を貸そうという人を相手に、神学によらない人の道を説いて回り始める。

2人の女性の死の直接的な原因となってしまったClymは、母との諍い、結婚生活の破綻、失明の危機などを経験して、ここに到ったのを見れば分かるように、この最後の姿が彼の宿命なのである。彼はハーディが描くところの「現代的」人物の1人であり、ロマン主義的希望とリアリズム的覚醒と諦観が交じり合った人物となっている。

注(1) この物語の「主人公は」エグドンであると主張する批評家も多い。ハーディはエグドンをこの物語の中心に置き、イギリスでは元来殆ど重視されていなかった「三一致の法則」を実践した。即ち、「時の一致」は11月5日に事件が起こり、1年後の11月6日に終わる。1年と1日で事件が完結している。「場の一致」はエグドンが唯一の舞台である。「筋の一致」はEustaciaのエグドン脱出の空しい努力とその結果起こる悲劇である。

(2) ここではロマンティズムを、社会の伝統や慣習が許さない範囲にまで、個人が欲望を満たそうとする時見られるものと、定義する。

(3) *The Early Life of Thomas Hardy*, p.231

(4) *The Return of the Native*, p.396の注

参考書誌

1. *The Return of the Native*, The New Wessex Editions; The Novels of Thomas Hardy, ed. by P. N. Furbank, 1974.
2. Hardy, Florence Emily, *The Early Life of Thomas Hardy 1840-1891*, Macmillan, 1928.
3. Cecil, David, *Hardy the Novelist*, Constable, 1969.
4. Guerard, Albert J., *Thomas Hardy*, New Direction, 1964.
5. Gregor, Ian, *The Great Web*, Faber and Faber, 1975.
6. Hawkins, Desmond, *Hardy, Novelist and Poet*, David and Charles, 1976.
7. Hurst, Alan, *Hardy: An Illustrated Dictionary*, Kaye and Ward, 1980.
8. Millgate, Michael, *Thomas Hardy, a Biography*, Oxford University Press, 1979.
9. Saxelby, F. Outwin, *A Thomas Hardy Dictionary*, Greenwood Press, 1980.
10. 鮎沢乗光「トマス・ハーディの小説の世界」開文社出版, 1984
11. 大沢衛(編)「ハーディ研究」(現代英米作家研究叢書)英宝社, 1976.
12. 大沢衛「黄昏—トマス・ハーディの小説」千城, 1988.
13. 小田稔(訳)「トマス・ハーディの小説における性格描写と運命形象」学書房, 1980.
14. 小田稔「トマス・ハーディ」篠崎書林, 1990.
15. 大沢衛・吉川道夫・藤田繁(編)「20世紀文学の先駆者トマス・ハーディ」篠崎書林, 1978.
16. 深沢俊(著訳)「T・ハーディ」(講座イギリス文学作品論9)英潮社, 1978.